

教 仁 名 聞

第35号
(発行日)

2013年8月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

死んだら無になるか

【自然科学の見方】

N 「息子に仏教を勧めるのですが、仏教を信じません。どうしたらいいのでしょうか」
D 「なぜ息子さんは仏教を信じないのですか」

N 「彼が言うには、人間は死んだら終わりで、何もなくなる。最後は無になってしまふのだから、仏教を信じても信じなくても結局同じ。だから自分は別に仏教を信じる必要は無い、というのです」
D 「へ人間死んだら終わり、何もなくなる」という考えは、現代の日本人に多い考えです。これは小さい時から、宗教教育を一切受けておらず、自然科学的なもの見方が中心の教育をずっと受けてきた影響からではないでしょうか」

N 「自然科学的なもの見方とは」
D 「科学的な見方とは、すべての現象や事物を物質の働きとして見る見方です。たとえば、カエルとは何かという場

【死ぬとは】

合、カエルを解剖して心臓や胃などを観察して、カエルとはこういうものですよと理科の時間に習いました。そういう視点から、人間とは何か。それは心臓があつて手足があつて、頭があつてと、そういう物質的生命の働きの総体を人間といい、それが人間としての私の正体なのだと、自然にそう考えるようになっていったと思います」
N 「そうすると私とは何か、私のいのちとは何か。それはこの身体だと、自然に思ってしまうのでですね」
D 「ええそうです。そうすると人間の本质は身体だ、私の当体は身体だと、思い込んでしまうのです」

N 「でもやはりへ人は死んだら終わり、無になってしまふのではないのでしょうか」
D 「多くの人はそう結論づけていますが、本当にへ私は死んだら終わりかどうか、簡単にとは言えません。まず私

ちはへ自分の死を経験して記述することはできません。死に近づいた人はいても死を経験した人はいません。ですからへ死はいつでも、私以外の他者の死の姿しか知りません。そして他者が死ぬとはどういうことかという、その人の呼吸や心臓が止まり、脳が活動しなくなる、いわゆる身体が動かなくなることです。それを視てこの人は死んだというわけです」
N 「心臓停止、脳死という、体の現象を外から見てへああこの人は死んだのだ」と判断しているのですね」
D 「ええ、人をどこまでも身体現象を外から観察して判断し、身体活動の停止を確認してへ死んだ」と判断しているのですね」
N 「そして、死んだら後は葬式して火葬場で焼いたら何もなくなつて、あとは骨と灰だけしか見えませんよね」
D 「ええ、そういう事態を外から視てへあああの人は死んでもう何も無い」と判断するわけですね」
N 「こういう考えが一般的ですが、何か問題があるのでし

よいか」
D 「ええ、そういう見方は人間をやはり身体としてのみ見ているのですね。ですから身体が動かなくなったのをへ死んだ」と言っているのです。だから人の身体の死を見て、私もあんなつて終わるのであり、ついには灰になつて何もなくなる結論づけてしまふのです」

【身体中心の人間観】
N 「人間を身体として見るのは問題なのですか」
D 「ええ問題です。人は肉体だけではなく、心があります。人間には肉体という物質だけでなく心(意識)があります」
N 「心と体とよくいいますね」
D 「ええ、そうして肉体と心が私とするなら、どちらが私という人間の中心であり、本質であるかという問題が出てきます」
N 「そうですね。心と体の統合体が人でありへ私」ですかね」
D 「もし、身体という物質が私の中心であり、本質であるという見方なら、それは唯物論の考えです。唯物論では、物質的な身体が私の本質であり、心は身体現象に収まるという見方です。いわゆる心は

よいか」
D 「ええ、そういう見方は人間をやはり身体としてのみ見ているのですね。ですから身体が動かなくなったのをへ死んだ」と言っているのです。だから人の身体の死を見て、私もあんなつて終わるのであり、ついには灰になつて何もなくなる結論づけてしまふのです」

よいか」
D 「ええ、そういう見方は人間をやはり身体としてのみ見ているのですね。ですから身体が動かなくなったのをへ死んだ」と言っているのです。だから人の身体の死を見て、私もあんなつて終わるのであり、ついには灰になつて何もなくなる結論づけてしまふのです」

身体機能の中ちゅうすう 枢しゅうである脳という物質の働きに収まり、その働きが心全体の働きとなつてくる。だから脳の機能が停止する、いわゆる脳死になると心の働きもなくなるといふ考へです。これは人間のいのち全体を物質現象として捉とらえる唯物論なのです。自然科学中心の見方もこれです」

【心が主体の人間観】

N 「そうすると、人が死ぬ、いわば脳が死ぬと、心もなくなるから、肉体（脳を含む）を焼くと灰になつて（私）という存在は一切なくなり無に帰してしまふ、ということになりますね。でもこういう考へは人間の本質を物質（肉体）と考える唯物論であつて、ほかの考へもあるということなのでですね」

D 「ええあります。心（意識）が人間の本質であつて、心が主体であるという考へです。」

（私）は肉体と言うよりも心の方が（私）であるという見方です。（私の心臓）とか（私の体）とか（私の脳）とか言うこと自体が、私たちは自分を肉体そのものとは本当には思つていないとも言えます」

N 「しかし、いざ私とは何か

となると、身体を自分と思つてしまふ場合が多いですね」

D 「ええ、というのは身体は見ることもさわることもできませんが、心は見ることも掴つかむこともさわることもできない、非常に捉とらえがたいものです。ですから、具体的な私を考へる場合に身体を私とせざるを得ないということもあるでしょう」

N 「私たちは目で見たりさわつたりできるものしか存在しない、といつてのまにか思いこんでいて、本当に在るのは身体だけだと思つてしまふのでしょうね」

D 「そうですね」

【心と脳】

N 「では人が死ぬ、いわば脳死になると心はどうなるのでしょうか」

D 「これが問題で、脳は心に収まると見る自然科学とか唯物論では当然、脳死は心の死でしょう。ところが心は脳に關係があつても脳の働きに収まるといえない、心は脳を超えている。いわば意識は物質を超えているという考へがあります。となると、脳が活動を停止しても心は無くなるのは簡単には言えない、心は滅するとはいえないということ

になりましよう」

N 「心は脳を超えているとはどういうことでしょうか」

D 「心と脳は關係があつても、脳の中に心は収まらないといふことです。脳を脳と知るのは、脳であるというよりは心（意識）の働きである、といふことのほうが直接に理解できることです。脳の働きの中のものでは、脳を脳と外から（客観的に）知ることとはできないといえます。卑ひさ近なたとえで云えば、地球の中にあると地球を全体的に知ることができません。地球を離れて宇宙へ出て地球を見ると地球の全体が知れます。脳を超えていなくては脳を脳とは知れない。脳を脳と知るのは心（意識）ですから、心は脳を超えているといえます。蛋白たんぱく質でできている物質的な脳は自分でできている物質的な脳は自分を脳とはおそらく知らないでしょう。知るの物質ではない心の働きでありましよう」

N 「そうですね」

D 「あるいはこうもいえましよう。心と脳とは同じ次元の存在ではなくて、心の働きは物質を縦に超えた、いわば次元の異なつた領域であるといえましよう。意識と物質は同

じ次元の存在ではなくて、次元が違うといえましよう。月を空に見ている心は月を包んでいるともいえます。心は山を知り河を知る。広大な物質的存在を包むような働きが心です。物質にはそんな働きはないですね。物質と心とは次元が違うといえましよう」

【死後存続の可能性】

N 「心と脳の關係、心と体の關係、あるいは意識と物質の關係は難しいですね」

D 「ええ、これは難問中の難問で未だに解決のついていない問題です。例えば記憶がどこに保存されているのかと云う問題だけでも、未だに少しも解決されていません。先日TVで、遺伝いでん子の二重らせん構造を発見し、生物学に大きな影響を与えたノーベル賞受賞者のクリック博士が（仮に記憶が脳細胞に保存されるとして、それがどういふメカニズムで保存されるのかを説明するには少なくともあと100年はかかるだろう。今は殆ど解明されていない）といつています。彼は自然科学者で唯物論者ですが、彼ですらその発言しています」

N 「記憶という心の働きすら、その本質は謎なのです」

D 「そのような心は現在でも見ることも捉とらえることもできないですね。だから遺体を火葬場で焼いて灰になつたのを見て（ああ何も無くなつた）と言つても、初めから心は見えないのですから、火葬場で焼いたからといって心が見えるはずがありません。心の存在は初めから目で見ることとはできませんから、（あの人は焼いたら何もなくなつた）といふのは目に見える物質としての人間の形がなくなつたと云うに過ぎず、その人の主体である心までもなくなつたと断定できません」

N 「そうすると（私とは心である）とするなら、死んでも無くなるのは断定できないということですね。物質である肉体は火葬されても心までは焼けるとは言えない、ともいえるのです」

D 「ええそういつてもいいと思ひます」

N 「そうすると、死んでも心という私（主体）は続いていく可能性があり、またそういう見解も当然成り立つわけですね」

D 「ええそうです。仏教では心的な主体（意識の連続体）は続くという考へを取りま

す。というのは、死んだらどうなるかについての考えは、大きく分けると三つぐらいになります。死んだら無くなつて何もないという唯物論的な考えを取るか、分らないと放置するか、あるいは心的主体が連続すると考えるか、どちらかを選ぶしかないでしょう。

う。世界宗教といわれるキリスト教、イスラム教、仏教では死んでも心的主体は、どういう形をとるかとは別に、連続するという考えを取るのが一般です」

【霊魂不説】

D 「ここから少し込み入ってきますがいろいろ申し上げねばならないことがあります」

N 「どういうことですか」

D 「私の心は一瞬一瞬変わっていくのでありながら、連続して、〈私〉という統一があります。そういう心的な意識の連続体としての〈私〉が死んで続いていくという話を聞くと、何か霊魂のような一つの塊としての心を想像しますが、そういう霊魂を仏教では認めていません。仏教では〈霊魂不説〉といい、霊魂を説かないのです。実際、今の心を思うとき、今の心をなにか塊のような霊魂としては考え

ていないと思います。ですから死んだからといって霊魂のようなものが肉体から離れてふわりと出て行くなどは仏教はいわないのです。心を一定の形をしたものとして考えるのは、すでに心を物質的に考えているからです」

【心と世界】

N 「では心（意識）とは何かという問題がありますね」

D 「心とは何か。これは大変難しいですが、少なくとも心は〈知る働き〉でしょう。それがあ

るから世界があるとい

つていいのでしょうか。心がなければ、その人（あるいは物）にとつて世界はないのと同じです」

N 「心がなければ世界がないとはどういうことですか」

D 「たとえ、目の前に机がある、扇風機がある、六畳の空間がある、あるいは一時間が経過したなどといえるのは心があるからです。暑いも寒いも、悲しいも楽しいも、病気や老化をいやがり、死を恐れるのも心があるからです。木々があり、月があり、太陽がありと分かるのも心があるからです。大体、唯物論者が、心は脳という物質現象だと唯物論的に〈考える〉のも心が

あるからであり、顕微鏡や天体望遠鏡で様々な物質現象を知覚し観測できるのも意識があるからです。意識がなければ世界はないでしょう」

N 「そうですね。目の前のコップは心がないから世界を知らないばかりか、自分がコップだということも分からないでしょうね」

D 「ですから自分の肉体を肉体と知っているのは肉体ではありません、心です。〈死んだら終わりだ〉などと

言っているのも心があるからです。もし世界が物質だけなら、世界はまったく無知の暗黒でしかありません。物質的宇宙を物質的宇宙と認識できるのは物質ではない心の働きですね」

N 「心がなければ、すなわち知る働きがなければ、世界がない、知られる物はない。ということなら、心と世界は一体といえるのですね」

D 「ええそうです。知る働きを離れて知られる物はなく、知られる物なくして知る心は成立しない。心を離れて世界はなく、世界を離れて心もない。これが真実のすがたでありましょう。ですから死んでも心が連続するという場合、

それはその心と共に世界も同時に連続しているものであつて、世界の中に霊魂というもののだけが浮遊しているなどと考えるのはナンセンスです」

【意識のレベルと世界】

N 「そうするとこの人間世界を離れてそれを知る人間の心もなく、人間の意識を離れて人間世界もないといえますね」

D 「ええそうです。それ故に、もし人間の意識ではない意識、たとえば餓鬼という欲望で一杯の意識においては餓鬼の世界が現実化しているのでしょう。もし憎悪で充満したレベルの意識であるとすると、それに応じた世界、いわゆる地獄が感知されている、いわば地獄を経験しているといえます。仏教では、意識のレベルとその意識に対応した領域を大きく六つに分けています」

N 「仏教で六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）と説かれているのはそのことなのでですね」

D 「ええそうです」

仏になるとは

N 「では死後に仏になるとか、浄土とか極楽に生まれるといわれるのはどうなのですか」

D 「それは煩惱によって濁っている意識が感じる境界であるような六道ではなくて、意識が浄化されて仏智（仏心）になると、そこに仏の世界、お浄土がおのずから感得されると説かれており、お浄土こそ真実ありのままなる領域であると教えられています」

N 「そうすると煩惱で濁った迷いの心だけでこの世を終えると六道に生まれると説かれるのですね」

D 「ええそうです」

N 「そう教えられるのですが、どうもホントかなあと思っています。そこはどうなんでしょうか」

D 「そう思われるのも無理ではないと思います。六道というような教説は仮説といつてもいいかもしれません。しかし、仮説だからといって、空想かというところは言えないと思います。そういう六道という領域が説かれねばならぬ深い道理があるのでしよう。私たちは生まれてからこの方、人間世界しか知りませんから、それ以外の領域を想像することは難しいことですね。しかし、人間の領域以外はないとは言えません」

N 「想像しにくいのですが」

D 「例えば、人間以外の犬を考えてみましょう。生物学的

にいえば、犬と人間は遺伝子的には殆ど変わりはありません。ちよつとした遺伝子の違いが人間と犬の違いになります。ですから私は人間ではなく犬に生まれていた可能性もあつたと言えます。もし犬に生まれていたら、犬は人間が感じていると同じようにこの人間世界を感じているかという、おそらく違って感じているでしょう。犬になってみなければ分かりませんが。犬には犬が感じている世界があるのであつて、犬も人間も同じようにこの世界を感じているのではないと思います。それは蛇でも牛でも同じで、意識が違えばそれに応じている世界も違います。そう考えてみると、死んでいく心の主体が、この世を終えれば、その心のレベルに従って次にどのような領域を感じるのか、想像は尽きませんが、それぞれに違った領域を感知しているといえるのではないのでしょうか。それを仏教では一応大まかに六道に分けて説かれてい

N 「死んでまた生まれ変わる

【輪廻説の受容】

とよく聞きますが、なかなか信じるのが難しいですね」

D 「これは輪廻説といい、これを信じるのは現代人には難しいことかもしれません。ただほかにそれに代わって、死後どうなっていくのかを納得できるような説明なり思想なり教説なり物語があるかという、なかなか無いのですね。むしろ輪廻説には他の説よりも道理に叶って説かれていると思います。もちろんこの輪廻説を信じなければ仏教は受け入れられないかというところではあります」

N 「輪廻説を信じなければ仏教はわからないというのではないのですね」

D 「ええ勿論そうです。私も若いときに仏教に入って、ようやく輪廻説を受け入れてきています。輪廻説はなかなか道理が深いと思つていました。ただ他者にこの説を強要はいたしません。ただ人間という存在があり、さまざまな生き物があり、この世界があるということは、実に驚くべき不思議なことなのです。私たちは人間に生まれて長い間たっているの、人間であることをあたりまえにしているだけです。生まれて間もない

赤ちゃんが目を見よるきよろして見ているのは、目に見、

耳に聴くものに驚いているのだと思います。輪廻説をあり得ないと否定することはできません。しかし、人も世界も極めて不思議なものではないでしょう。輪廻説を含めて不思議なことはいくらもあると思つていきます。現代の宇宙論を讀んでも不思議なことだらけです」

【生まれ変りの一例の私】

N 「でも死んで何かに生まれるといふことがどうしても考えにくいのです」

D 「そうですね。ただこゝうはいえるのではないのでしょうか。既に過去から現在へと、何かに生まれた一例が私という人間存在だと言うことです。私という人間は過去の世界からこの現世に何かとして生まれ出た一例で、気がついたら人間だったといえませんか」

N 「来世があつて何に生まれるかということは信じられなくても、私は現世に何かとして生まれ出た一例としての人間である、といわれるのですね」

D 「ええそうです。(無)から私が生まれたとは言えな

い。人間に生まれる因が生まれる前にあつたわけです。それを現代の科学では親の遺伝子が私の生まれる因と言いますが、遺伝子は肉体を形成する形成因であつても、私の主体である心の原因とは必ずしも言えないと思ひます。私という人間の主体である心はどこから出てきたのか、それは過去世から生まれ出てきた、すなわち人間に生まれるべき心因があつて、その心に応じて身体として人間の形を取り、人間世界を認識している、それが私だともいえるのではないのでしょうか」

N 「そうすると私という存在は過去世から現世に続いてきた心の主体の表れであり、この世が終わると次の世界に連続していくといえるのですね」

D 「ええそう受けとつてはど

うでしょうか」

【仏の願い】

N 「では仏教で仏になるとは」

D 「仏になるとは最早生まれ変わり死に変わることがない、いわば生死を超えたのが仏になるということで、それこそ生きとし生けるもの、真実願うべきことであつて、輪廻するのは願わしいものではないありません。迷いの心があるから輪廻するのですから。生死輪廻を超えさせて仏にしたいというのが阿弥陀仏の本願であり、仏にして下さる因が南無阿弥陀仏です。仏教は輪廻を主題として説くのではなく逆に、輪廻から解放されて仏になる道を説いているのです」

N 「難しいお話でしたが、大事な点を有難うございました」

(了)

《盂蘭盆会法要》

八月十日(土)

午後二時始まり

*法要の際、法名をご持参下されば仏前に安置させていただきます。
*八月十二日と八月二十二日の集まりはありません。
*八月二日(座談会)・八月六日(聖典学習会)はあります。